

子ども福祉における多文化共生の今

——療育・保育現場からの報告——

三山 岳・岩倉けいら・川上貴美恵・佐々木由美子

2019年11月16日（土）に、愛知県立大学生涯発達研究所連続セミナー「多文化社会における多職種連携—教育と福祉の現場から—」の第3回として、「子ども福祉における多文化共生の今—療育・保育現場からの報告—」が開かれた。その内容を以下に掲載する。

〈コーディネーター〉

三山 岳（愛知県立大学准教授）

〈報告者〉

岩倉けいら（長浜市教育委員会幼児課通訳）

川上貴美恵（社会福祉法人せんねん村多文化事業コーディネーター）

佐々木由美子（足利短期大学教授）

1. カルチャーショックと調和しながら生きる

岩倉けいら・三山 岳

(1) 長浜市と外国人居住者

私、三山は長浜市で療育にかかわっています。講師の岩倉さんが長浜市にいらっしゃったのは、長浜で外国の方がとても多かったころとは違って少し人口が減ってからの話ですので、その前の長浜市の状況を少しお話しします。

滋賀県長浜市は滋賀県の北部にあります。黒壁スクエアというところで最近是有名ですがけれども、観光都市としては滋賀県の中で一番観光客が多い場所です。もともとは秀吉が城を建てて、近世も鉄砲づくりでかなり有名だったので、昔からある程度栄えていた地域です。現在は11万8,000人で、合併して人数が多くなりました。

外国の方が今どれぐらいいらっしゃるかということですが、2006年が人口のピークで、住民比

率は6.54%です。その当時、日本の外国人の人口は1.56%、これは全国平均ですから、5%近く上回っていたということで、かなり多かったということです。リーマン・ショック以降ちょっと減ってはいるのですが、今は安定しているのと、滋賀県の北の方は過疎が始まっていますので、パーセンテージはむしろちょっと上昇みになりつつあるかなという形です。そのため、外国人集住都市会議という会議の主催地になったこともあるというような、外国の方が多くことではよく知られたまちです。

国籍で圧倒的に多いのが南米出身の方々です。平成20年度の時には4分の3の方が南米出身の方で、現在も3分の2以上おられます。なぜこれだけ多いかという話ですが、もともと長浜市というのは国際交流を大事にしてきたまちというのがありました。最も大きかったのは、長浜市のお隣の米原市に、サンパウロに事務所がある人材派遣会社があったことです。実際、長浜にも事務所と

社宅があります。そこから名古屋や大阪などに人材を送っていたという関係で、最初のストップ地ということから長浜の人口が多かったということです。ブラジル人学校も今もあります。

2005年から10年、外国の方が多くということ色んな研究とか調査も入られています。長期滞在の方が多。2010年のJICAの調査によると、一軒家に住まわられている方が15%もいるということから、実は長期でも3年以上の方が結構いらっしゃるというところ。ですから、リーマン・ショック以降も残られている方が多く、定住されているという方が多いというのも地域の特徴。なぜそれだけ多いのか。先ほど言ったように、長浜は少し過疎が始まっているような地域ですけれども、JICAの報告に書かれている理由としては、子ども世帯にとって長浜というのは非常に評価が高い。若者が住むには少なくともおもしろみに欠けるが、子どもを育てるには安心できるような、色んな病院もいっぱいあるし、交通が便利だし、北陸と関西と東海の結節点という場所であるということ、非常に家族の満足度合いが高い、と評価されています。このため、リーマン・ショック後も滞在型で長浜に住んでいらっしゃる方が多いというのが長浜の特徴です。

その結果、長浜の中では共生のまちづくり指針を作り、そして、多言語で母子手帳とか問診票も作り、通訳員をかなり配置している。また、入園後は支援員が巡回したりとか常駐していたりとか、そういうような仕組みを整えています。(三山)

(2) 日本に住む南米出身日系人の歴史

私、岩倉は出身地がブラジルで、先ほどの三山先生からのお話と重なるかもしれないのですが、私のほうからも長浜市での外国籍の方の歴史や、私自身のことを少しお話しします。

いきなりですが、話を始める前に2つ質問させていただきます。1つ目は、日本になぜブラジル人が在住しているのか、皆さん考えたことがありますか。先ほど三山先生のほうから仕事をするためとか、日本で派遣をやっているとかを話してく

ださったのですが。2つ目の質問は世界最大の日本人コミュニティがブラジルにあるとご存じでしたか。移民について少し話をします。

1908年から1973年の間に、ブラジルのコーヒー畑で働くためや、よりよい生活を求めておよそ20万人の日本人がブラジルへと移民しました。特に第二次世界大戦時の歴史によると、最後の船は1983年にブラジルに上陸しました。私の父も1950年に3歳の時、家族7人でブラジルへ移民しました。多くはブラジルで家族をつくり、安定した生活を送られるようになりました。現在ではブラジルの人口の1.09%、約1,500万人の日系ブラジル人がブラジルで暮らしています。

ところが、日本のバブル時代に、1980年代から1990年までブラジル人の逆流移民が開始しました。日本が労働者不足のため、日系3世までの方やその配偶者や家族が入国許可されました。その時にブラジルは失業率が高く、人口の4.6%ぐらいでした。日本で働く機会を得て、加えて、ご先祖の国を知ることが夢のようでした。私もその1人でした。今年の8月に一時帰国をして、ブラジルはすごく発展してきているのですが、今でも失業率が高く、少し経済が悪い状況です。

移民を開始してから40年がたちました。日系ブラジル人の数が2009年のピーク時に、30万9,000人も誕生してから、リーマン・ショックのためその数がぐっと減り、現在およそ20万人だそうです。ブラジル人が日本で生活しているのは、主に大手自動車製造会社がある地域に集中しています。愛知県が一番多く、5万4,000人ぐらいいるということです。

(3) 長浜市における外国籍児童の状況

私が住んでいる長浜市も電化製品や食品とか自動車の部品製造工場が多いのです。滋賀県全体はまだ多いけれども、長浜市はリーマン・ショックですごく減ったということですが、今現在も外国籍人口が3,470人います。そのうちブラジルの方が45%。長浜市の人口は令和元年10月時点では11万8,000人で、そのうち外国籍が2.9%です。

ブラジルの人が1,700人ぐらい在住しています。

図1が、幼稚園、保育園、認定こども園の外国籍児童数が過去5年前のグラフです。ずっと増えてきているのですが、平成31年4月時点では、ブラジル人やボリビア人とペルー人が130人でした。ボリビアとペルーの言語はスペイン語です。スペイン語はポルトガル語に似ているため、私はポルトガル語の通訳ですが、このペルーとボリビアの子にもかかわっています。小中学校は、平成31年4月時点で240人でした。以前はもっと外国籍の方が多かったのですが、現在は人数がちょっと少なくなりました。けれども、こうした経緯から今、長浜市は多文化共生ができるような取り組みをしています。

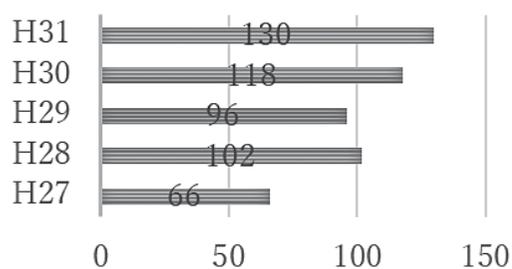


図1 長浜市内の南米3カ国日系人在園児童数

長浜市役所にはポルトガル語とスペイン語の通訳9人を配置しています。市役所には常勤の方が8人、非常勤の方が1人、ながはまウェルセンター、支援センターというところに常勤が1人で、幼保認、つまり幼稚園、保育園、認定こども園には合わせて常勤が2人、非常勤が2人、そして小中学校には9人を配置しています。非常勤なのですが、幼保認については通訳兼保育士を配置しています。外国籍園児が多い園には配置され、園生活にスムーズに入れるように支援をしています。特に3歳から5歳までの園児は思いを伝えることが大事なので、母国語で思いを聞かれて応答しています。日本語が通じない保護者には、園便りを翻訳したり、日本の教育制度について説明したりしています。園生活について伝えることで保

護者に理解してもらったり、保育活動、参観日や奉仕作業、園の独特なそういう活動に参加や協力をしてくださったりしています。

(4) 外国籍の子どもの就園

私の経験や印象に残っている事柄を皆さんに紹介します。私の職場は市役所の教育委員会幼児課というところで、外国籍の保護者の方への対応や通訳をしています。入園、入所の相談に来られた方に、保護者の思いを聞きながら就学までの流れを説明します。

地域で就学予定している方には、幼い時から入所するメリットについて話をします。地域の学校に入学するなら、日本語で学校生活を送るために5歳児より3歳児で入園したほうがいと説明します。そうすることによりカルチャーショックが減り、スムーズに入学できます。

保護者によりますが、お子さんが5歳で入園したら十分日本語を学べるという軽い思いを持っています。実際はそうではないです。早いうちに3歳から入園している子が5歳児から入園する子より、日本語だけではなく文化も吸収しやすいと説明をしています。日本で就学しない人には、逆に母国語を覚えたほうがよいということを説明しています。まだわからないと悩んでいる人には、私自身のことを伝えたりしています。

私も子どもが就学前に帰国したかったのですが、まだ帰国できない状態で、すごく悩みました。ブラジル学校の選択肢もありましたが、地域にもなじまないといけない、友達をつくらないといけないという思いがあり、地域の学校に入学させました。今思うと、もう二十で就職しているので、地域の学校に入学させて良かったなと思います。そういったことを保護者に説明し、自分自身が経験していることも伝えることでより理解してくれます。

また、長浜市の園に入園させた保護者の話ですが、南米の国の母はロングヘアが多く、女の子も母みたいにロングヘアの子が多いです。母も娘の髪の毛を切りたくないことがほとんどです。切っ

たら、カールがなくなると、なかにこだわりがあるようですが、これはこだわりよりも文化だと思えます。なぜかという、ブラジルではロングヘアがおしゃれと認知されています。一方、日本の園生活には、ご飯を食べる時とか活動中には邪魔になるため、ショートカットが望ましいと思えます。

ある保育園にきれいな髪の毛をしていた女の子がいて、大好きな友達が日本人でショートカットだった子でした。その影響で自分もショートカットにしたいとお母さんに伝えて、お母さんは嫌々ではなく、そうですかと娘の思いを受けとめて髪の毛を切った。こうやって子どもの思いを理解し、今はその子たちは仲よくしています。この間会ったのですが、またロングヘアでした。

こんなエピソードもありました。5歳児で入所し、日本語がわからない男の子がいて、絵本の読み聞かせの時間に聞こうとしない子だった。嫌どこかに行くという様子でした。けれども、私が初めてポルトガル語の絵本の読み聞かせをした時の、担任の先生から、その子の目がきらきらして、最後まで話を聞いてくれた、今までなかった様子だったと感動したコメントを聞きました。母国語を聞き、日々のストレスの解消ができ、効果があったかなと思っています。

言葉の面は、新入園児で園生活に困っている子にはできるだけ母国語でかかわるようにしています。日本語がわかっても、母国語でぱっとしゃべってくれたり、本来の思いを伝えてくれたり、胸の内を聞くことができ、そこに困っている原因があることがわかります。母国語のそのことを担任の先生に伝えることにより、よりよい支援ができています。

(5) 外国籍の子どもと療育・特別支援教育

特別支援教育についてですが、日本人でも課題がある。クラスにいられない、活動に参加しようとする児童が増えていきます。ブラジル人も同じく、まして日本語がわからないため、特別支援児が増えていきます。できるだけ母国語でかかわった

り、母国語でも易しいわかりやすい言葉でやりとりをしたりしています。イラストカードなども母国語を使用しています。ある程度日本語になれてきたら少しずつ日本語に移行し、混乱しないように母国語と日本語をまぜないように気をつけています。どうしてもおうちでも子どもとよくポルトガル語と日本語をまぜながら会話しているのですが、何語ですかと聞かれたことがあります。現場で気をつけながら日本語かポルトガル語、母国語だけを言うように気をつけています。

保護者支援についてなのですが、保護者が若い時から来日し、ブラジルの教育制度についてよくわからない、日本の教育制度についてもわからないケースが増えていきます。特別支援教育についての理解が日本人よりも時間がかかります。中には理解しない人もいます。就学指導で就学先の答申をされる時に時間をかけ、何回か懇談会をして、見学も1回だけではなく2、3回、場合によっては4回もして、ゆっくり丁寧にお子さんに合った教育について説明をします。お子さんにとって負担が少ないとか、学びの場であるということを理解してもらって、納得した上で入学しています。

小学生が家族にとって一番大変な時期かもしれない。園に入園した時にみんなと入園したとしても、就学先が違ふことが家族にとって初めてその課題に向き合う時であり、現実を見詰めるなければならない時です。その時に、親子だけではなくて保護者の思いに寄り添いながら就学指導をしています。

さまざまな家庭がおられたのですが、一番印象に残っているのは、妊娠の時からダウン症候群を知っていて、そういう母が特別支援学校という答申が出た時に、見学してから、特別支援学校の様子子どもにふさわしくないとか、よだれかけをかけている子がいるとか、奇声を上げている子がいるとか、自分の子にはふさわしくないというインパクトが大きかったと思います。どうしても地域の学校がいいと思って、2年生まで地域の学校に入学し、3年生の時からやっと特別支援学校へ移ったというケースがありました。

ほかに、自閉傾向、5歳児で入所した子がいて、母国語でも話ができない、こだわりが強く、コミュニケーションが難しいお子様でした。5歳児までは託児所。長浜市に託児所というブラジルの人が託児しているところが2カ所ありまして、そこに0歳から4歳まで預けられた子でした。入園してから療育も始めたが、半年がたった時に、療育の効果が無いという思いがあって、療育をやめたいと両親が言ってきました。その子の就学指導が1学期からスタートしていて、懇談会を4、5回していて、しかも1回につき3時間ぐらいかかっていました。話していたにもかかわらず、就学先の答申をした時に納得してもらえませんでした。地域の学校に入学する方向になってしまった。家族がちょうどその時上の子が大学へ進学することを計画していたため、下の子も上の子みたいに大学まで進学してほしいという希望が強かったです。日本人に比べると子どもの特性や成長についての期待が大きいため、支援に対してあんまり必要と思っていない。自然に成長していくという自信があります。

また、こんなケースもありました。ダウン症で酸素ボンベも使っていて、療育や支援を受けていた子がいて、小さい時から特別支援学校という思いがあった家庭でした。日本人と同じように個人差があるかと思います。ほかに知的障害特別支援学級の答申が出て、それに賛成した保護者がいて、賛成した理由は、上の子が就学時にも同じ答申が出て、理解ができず通常学級に入学させました。けれども、2年生から親自身が特別支援学級を希望しました。通常学級で困っていて、あの時答申どおりに入学させていたらよかったなというコメントも聞きました。このような経験があったから、下の子の答申をスムーズに受けられたと思います。

就学指導でよく聞く保護者の思いについてまとめました。①知的障害よりも日本語ができないため、困っているという思い。②思いどおりに成長できないときに医療機関で原因を調べて、治療していきたいという思い。③就学先の答申が出た時

に、医療機関のお医者さんから特別支援学校や特別支援学級を勧められたら納得するという思い。そこで、保育園や支援センターが医療受診をするようにプッシュすることが大切だと思います。

あとは④大学まで進級してほしいという思い。親が大学を卒業していないからこそ、子どもが大学や専門学校へ進学してほしいという思いがとても強いです。中には、「私たちみたいに製造工場で働いてほしくない」と強く言うコメントも保護者から聞きます。⑤日本人が曖昧な言い方をするので、ずばっと言ってほしいという思い。周りの人は、園の先生、支援センターとかから具体的に言ってくれないという思い。

個人的にもそう思っています。私たちは外国籍にはストレートに話してほしいという思いがある。例えば、「通常学級への就学が難しいかな」という言い方よりも、「通常学級で学習できると保証ができない」、こうやってストレートに言ってほしいという思いです。日本人は相手に失礼なことを言いたくない、傷つかせたくないという思いかもしれないけれども、私たちにとってわかりにくいので、ストレートに言ったらいいと思います。

(6) 保育現場における多文化共生

最後に、長浜市の外国籍在園児支援について少し紹介します。ポルトガル語で絵本を読み聞かせをしたり、園外保育で通訳兼保育支援したりしているのですが、外国籍の子どもが40人ぐらい在園している園では、毎週1回、ヴァモス・ブリンカール（Vamos brincar）という、「遊ぼう」という意味ですが、外国籍の子どもだけではなく日本人の子どももその活動を行っています。

その園では2年前から通訳兼保育支援員として男性の方が働いているのですが、例えば、ジェスチャーで動物や物を表現して子どもたちが答えを当てるゲームをしたり、みんなで輪になっている遊びはブラジルの伝統的な遊びで、バタタ・ケンチ（Batata Quente）という言葉ですが、輪になった子どもたちが熱い焼き芋をポルトガル語で歌い

ながら次のお友達に渡すゲームで、歌がとまったら、熱い焼き芋を持っている子が負けというゲームをしたりしています。日本人の子どもにも大人気です。今日やりますかと毎日聞かれているみたいです。

他にも、外国籍の子どもが多い園は、外国籍の保護者が園生活についてわからないことが多いので、おしゃべり会を通じて色々話し合うことによって不安をなくしたり、よりよい安心で通園できるようにされている活動があります。

これからも通訳だけではなくブラジルの文化や日本の文化を互いに伝えながら、園や保護者の橋渡しとして保育や就学指導に当たり、支援をしたと思っています。

〈質疑応答〉

Q. 外国籍の子どもの療育について

感想ですが、岩倉さんからお話があった、特別支援について理解に時間がかかり、子どもに合わせた学校選択も大事だということを決めるのに時間がかかるというようなことだったのですが、一方で、もし母国であれば、そういう特別支援学級なら特別支援学級に行かなくてもいいような子の今受け皿がなくて、特別支援学級に、というそういうものも結構多く含まれているのかなということがあります。

私は今、横浜の保育現場に少し縁があって、急に入ってきた外国籍の子どもがいて、そこでは、やっぱり今3歳で入った方が良いということで、確かに3歳位だとできるようになるけれども、何人かいる中で全然違う経過をたどった子がいて、途中で保育者が、これは言葉だとか育ちの問題ではなくて発達の問題だなと思い始めて、伝えていて全然伝わらなくて。それで遠回しに保護者に聞いたけど、全然伝わらなくて。

お昼寝が一緒にできなかつたり、給食と一緒に食べられなかつたりするけど、親は「一緒にして欲しい」というのをすごく強く言われました。でも、それは無理なのだと一生懸命話すんだけど、そこがなかなか伝わらなくて。ちょっと心配だか

ら、やっぱり専門機関に行った方が良いということに相当時間をかけて言ったのですが、日本人にジャッジされたくないと言って退園されたのです。

退園した後にすぐに転園されて、他の園に行ったけど、それも同じ様なことがあったらしいんです。そういう途中で分かっていく子と、それから、本当に発達に問題がある子がいて、ただ、それは5歳ぐらいで園に入ってきた場合は、本当にどちらの問題か分からないことがあるのだらうなと思って、その辺の判断はどういうふうにされているのかというご経験があればお聞きしたいです。**岩倉**：長浜市は、外国籍が多い。定住者よりも永住者の方が多いです。永住者は、永遠に日本にいていいよという許可なのですが、長浜市にいるブラジル人とかはほとんど永住している方です。なので、日本でこれから生きるということや、子どもたちも日本の教育を受けなければならないという意識が高い人が多いです。

特別支援員という前提で、様々な家庭がありますが、3歳で幼稚園に入園して、偏食の子もいるのですが、家でおやつを食べただけ食べさせたり、靴を履かせたり、ボタンを一度もはめたことがないとか。それならいいんですが、子どもの力がないというのがやっぱり把握しにくいです。全てしてあげるのと。ところが、入園した時に、教えたなら覚える子もいれば、教えてもできない子がいるのです。そこで、日本語ができる方は日本語で直接先生がお話ししたり、発達支援相談を受けたらどうですかと伝えたり。

お母さんに「家で困ってない？」と尋ねると、もちろん全てしてあげているから、「困っていない」と言われますが、園ではできていないですとか、一度発達相談を受けたらどうですかと説明すると、受けないという人がほとんどいないです。そういった相談を受けて、どこの力がないとか、本当に発達に何か障害があったらすぐに療育を勧めています。

療育のイメージが、昔、知的に何かあるというイメージだったのですけれども、最近外国籍も増

えてきて、最近支援児の対象も増えてきているので、嫌と言う人が少なくなっています。療育をしながら保育園や幼稚園で間接的に支援しながら、そういう特性が重なったら、療育を受けたり、支援先に繋げたりします。療育だけの方もいるのですが、保護者が一緒に療育に参加したことで、子どもを見ていて、他の保護者と触れ合うことで、このことを家でもやってみようとか、そういう認識も少しずつ増えてきます。

園がそれを把握して保護者に話す。家で困っていないけれども、就学したら自分でできるようにしていかないといけないし、早いうちに相談してみようねという声はかけています。

2つ目の退園してしまった子についてですが、私のほうにもそういった方がいました。成長をして欲しいという希望で入園させたのですが、成長していないとか、園のせいにし始めたりしました。その特性を納得するまで時間がかかる。3歳児で入園すると、3、4歳ぐらいで園も考えたり、言葉だけではないと把握したり、5歳は就学前で、就学前だと遅いと思います。気づいた時から療育や就学先の話もしていかないといけない。日本人とその辺りは違います。日本語ができないから困っているとか聞くんですが、そこは上手に、そうじゃないよとか、実際にお会いしたり、丁寧に懇談会をしたりしています。ある家庭が夜の8時ぐらいまで働いていたので、8時から懇談会を開いたり、土曜日しかできない時は、土曜日に設定したりとかいった方向で支援をしています。

2. プレスクールの実践から

川上貴美恵

(1) 西尾市と外国人市民

私からは、どちらかというシステムチックにプレスクールを市全体でやっていることの紹介になります。

西尾市は愛知県の中で三河湾に面したところに位置をしています。西尾市は、大学などはないで

す。専修学校や看護専門学校はありますけれども、高校までです。西尾市は幼稚園と公立の保育園、合わせて41になっていますが、市役所が入園の手続の窓口になっていて、直接かわりがあるところは39園です。人口は17万です。地味なまちなのですが、合併をして近隣の町村と一緒になったことで17万都市になっています。西尾市の日本人の人口は自然減です、高齢化のこともあって。外国人市民の方はここ何年かは2桁ずつ、ずっとプラスが続いています。なので、社会増ということになると思うのですが、11月1日現在で外国籍の市民の方は1万人を超え、今現在、人口の5.8%になります。これはリーマン・ショックの時を超えて、私が見る限り過去最高だと思っています。

西尾市の産業は、豊田市だとか岡崎市だとか比較的大きな会社があるようなまちのすぐ隣ですので、下請だとか子会社、孫会社、零細企業、そういった関連企業もたくさんあります。あとは地元の産業は、海産物やお茶、それからウナギ。こういったことをご紹介しますと、ほぼ静岡じゃんと言われますけど、西尾もウナギをいっぱいやっています。

インドネシア出身やベトナム出身の主婦の方で、日中パートをしたい方、内職をしたい方は、そういった海産物系のせんべい工場や、漁師さんが使う網を直すなどの仕事をされている。製造業もありますが、農産物の加工などに携わる方も多くいらっしゃいます。

西尾市の外国籍の住民について、多い順番に最新のものを調べてきました。第1位がブラジル出身の方で3,700人ぐらい。2番がベトナム出身の方で2,400人に迫るぐらいです。第3位がフィリピン出身の方で1,400人ぐらい、その次がインドネシア出身の方が660人です。

(2) プレスクールの紹介とその効果

① プレスクールの紹介

そもそもプレスクールって何ですかということですが、よく英語教育などを行っている幼稚園など

のことをプレスクールというふうに呼ぶところがあります。私たちは就学前の外国につながる子どもさんたちに日本語指導を中心とした初期指導を行うプログラムのことをプレスクールと呼んでいます。内容は、主に絵本を使った日本語学習や、学校のルールや、平仮名、数量の概念習得です。日本語と日々子どもたちの生活にかかわることと結びつけていくような活動が主になります。これは平成20年度より開始をして、今年で11年目になります。

西尾市が実施をしているプレスクールは実は2種類あって、1つ目は外国にルーツを持つ在園の年長児さん対象のプレスクール。これは私たち指導員が、子どもさんが通っている保育園に平日の日中お邪魔をし、通常保育内で保育園の施設内で行うものです。親御さんの同意と、園の先生方にも承諾をいただき、実施をしています。

2つ目が、外国にルーツを持つ就園をしていない5歳児さんのプレスクール。就園をしていないというのは、色々事情があります。引っ越しや出産、病気だとか色々ありますが、そのような事情で就園をしていないお子さんのところに市役所の方と一緒に家庭訪問に行き、個別にお話をし、多文化ルーム KIBOU でプレスクールのクラスがあるから来ませんかということで参加をしてもらうということになっています。その2つのプレスクールを西尾市では実施しています。

②プレスクールの効果

まず、その効果についてお伝えいたします。わかりやすいところで言いますと、子どもさんが学校に行くことがとにかく楽しみになるということです。あとは、学習に前向きになることで保護者の就学への気持ちを高めていく、準備を一緒にしていくところで、まず効果としてはあらわれやすいところです。

それから、就学説明会を夏に開催していて、そこで就学についての正しい知識を伝えます。そういったことで漠然とした保護者さんの不安を拭いていけるという効果があります。就学説明会は、

ひたすら説明をするというよりも、学校の見学や用品の展示が中心です。すぐ近くにある学校にお願いし、開けてもらい、グループで集合して、保健室や図書室を見て回り、戻ってきたら今度は児童クラブの担当の先生に来てもらい、児童クラブの案内をあわせてしてもらおう。1回来て全部済むように、とにかくみんな来てという感じで開催をしています。

もう一つが、就学前からの支援です。いつの間にか知らない間に6、7歳になっていて、不就学になっていたということや、自信がないまま小学校に行き、やっぱりだめだったといってドロップアウトするようなことが防げるということです。

そして、これは大人的にはとても大事なのですが、就学先の先生との顔の見える関係づくりで、就学前のお子さんの様子、ご家庭の様子を伝えることができることです。外国出身のご家庭で、通訳さんを入れないと直接コミュニケーションができないということで、学校の先生方も苦手意識が多少あり、本当はどうなのとか、家でどんな生活をしているのか、など不安を抱えていらっしゃる。朝から夕方まで一緒にクラスで活動する子どもさんなので、ある程度きちっと情報を掴んでおきたいということで、保護者さんを含めてご家庭の様子をお伝えすることができます。

(3) プレスクール実施の流れ

①在園児のプレスクール実施の流れ

在園の年長児さんを対象にしたプレスクールの実施の1年間を通しての流れは以下のようです(図2)。

9月	対象候補リストアップ
10月～11月	語彙調査(巡回訪問) 対象児決定
12月～	プレスクール(巡回訪問)
2月	小学校教諭見学月間
2～3月週末	おやこプレスクール
～3月	プレスクール終了 アンケート実施

図2 プレスクール実施の流れ

就学の前年度の始めに、子どもさんの全体の把握調査が必ずされます。そこで、出身国や、子どもさんの名前が全部リストアップされますので、それをもとに市と共有し、対象になるだろうという候補の子どもさんをリストアップします。

そして8月末に就学説明会をします。そのあたりで大体どんな子どもさんが年長にいるのかというのは分かっていますので、秋に語彙調査をします。これは、愛知県のプレスクールの実施マニュアルを参考にし、簡単な対面式のインタビューで、1人15分～25分くらいで実施します。そこから対象児を決定し、12月から指導員が一斉に市内に散らばって巡回訪問をしてプレスクールを始めます。年が明けて2月になると、小学校の先生、新入学児童担当の先生は教務主任の先生が多く、教務の先生にお声がけをし、自由に見に来てくださいという月間を設けます。

先生ご自身の勤める学校のすぐ隣にある保育園や幼稚園だと、幼保の連携は地域のすぐ近くなので交流があったりすると思うのですが、保育園や幼稚園は学区に関係なく保護者の勤務先の近くの園に行っているため、子どもさんが行く学校と全く違う地域の園に通っている子どもさんもいます。遠いところに通っている子どもさんに関しては、小学校の先生はぜひ見たいということですので来てくださいます。

また2月～3月は、親子で参加する週末の親子プレスクールを開催します。そこで親御さん同士の横のつながりや、情報交換などもしますので、そのような機会をつくり、3月にすべてのプログラムを終了します。

②未就園の5歳児のプレスクール実施の流れ

就園をしていない5歳児の子どもたちのプレスクールは、今ご紹介したものと全く違うものになります（図3）。

対象の子どもは、家庭の事情で就園ができない5歳児です。出産や病気、失職などの理由が大きいです。そういった子どもさんをどうやって見つけるのかということですが、教育委員会との協働

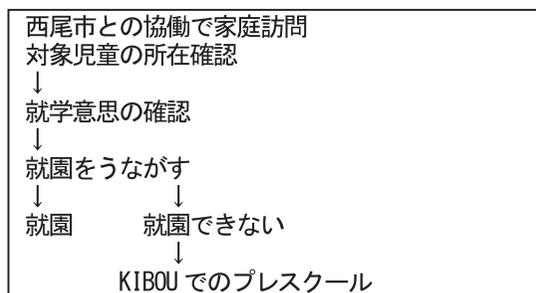


図3 未就園5歳児のプレスクール実施の流れ

で戸別の家庭訪問をします。これは毎年行っていて、年齢の子どもを含めて5歳から15歳の子どもを市全域で調査し、園に通っていない、それから学校に行っていない子どもたちを戸別訪問して見つけています。

実施の流れについては、まず、市との協働で家庭訪問をして、対象児童の所在の確認をします。名前だけ残して帰国していたり、国が近い方だと子どもが頻繁に母国と日本を行ったり来たりするので、名前は置いているが、実は暮らしてはいないという方も結構いらっしゃいます。所在の確認をしてから、就学意思の確認をします。意思が確認できれば、近くの保育園や幼稚園を見に行ってみませんか、学校に行くつもりがあれば、周りのお友達と仲よくなると小学校に行ってから楽しいよと、就園を促します。声をかけてもらったし、そのつもりだったんだよねという感じですがすぐ就園される方もいらっしゃるし、なかなか気持ちが固まらないまま年度末までかかる方もいらっしゃるんですけども、就園できない場合は、KIBOUでのプレスクールを実施しているので来てくださいというふうに声がけをしています。

(4) 担当指導員による感想から

5歳児のプレスクールを担当している指導員から感想が幾つか出ていますので、それを紹介することで、鬼ごっこをやるとスタッフが余裕で逃げ切れる子もいます。あとは、偏食が多い。好きな時間に好きなものを食べて、好きな時に寝るとい

うご家庭、各家庭でのしつけというよりもそういった環境になっているんです。家庭で赤ちゃん扱いされているということも過去にありました。例えば、靴を脱いだら誰かに履かせてもらえる。履かせに来てくれるまでずっと棒立ちだとか、ボタンをはめた経験がないとか、そういったこともありました。もしかしたら、ご家庭だけだと気づきにくいかもしれません。日々の生活で親御さんが全部やっていて、周りの人が荷物を持って、靴を履かせて、機嫌が悪くならないようにおいしいものを食べさせていると、いつの間にかそれで5歳になり、いよいよ就学になると、今度は厳しいところもあったりします。

また、子どもに活動の順番を絵カードで伝えると、とても効果的だったということも聞いています。これは、色んな国出身の子どもがいるので役立ちます。ブラジル出身の子、最近ではフィリピン出身のお子さんがよく利用してくれます。私たち指導員もいろいろな国の言葉が話せるわけでもなく、その都度通訳さんに入ってくださいわけてもないので、直接法でわかりやすい絵カード、それから活動と言葉を結びつけ、体を実際に動かしてそれが意味する言葉を導入していくという活動が効果的です。

就園経験のある子どもさんは家の中で長く過ごすストレスが発散できずに、プレスクールに落ちついて参加できない。はっきり言うと、爆発をします。本当に飛びはねて、登れる高い所には全て登るといような危険なことをする子もいます。子どもさんへ時計を意識させると活動にメリハリが出るということも言っていました。

(5) 保護者への支援

保護者さんは子どもを通じて社会との繋がりを持てる良い機会になります。家庭の中で、お父さんかお母さんか、仕事をしていない方が家の中で子どもさんと1対1、2対1の関係でいると、なかなか家の外で起きていることもわからなかったり、社会との接点がなく寂しい思いということがあったりすると思います。プレスクールに来る

ことでいろいろ刺激がもらえて社会との繋がりを感じられるという声があります。

課題としては、声をかければ、待っていましたとばかりに保育園や幼稚園に行く人ばかりではないので、就学の前に就園を促すためにいろいろ工夫が必要だということです。学校だと集団生活や給食が容赦なく、初日から突きつけられます。だから、そういったものに慣れる機会は就学前に必要です。

家庭の状況が不安定で就学先を決めかねている家庭も、毎年何家族かはあります。

多言語による就学説明会を夏に開催していると紹介しましたが、近くの公民館（ふれあいセンター）を借りて、そこで学用品を大きい机に並べて自由に触ってもらっています。

こういった学用品の写真と名前、子どもさんが学校にしていくのに適した服装についても伝えます。特に寒い時期になって、幼稚園や保育園の子どもたちを見ていると、裸にフリースという格好をしている子もまだまだいて、汗をかいて余計寒いんです。裸にフリースって本当に寒くて、風も通すし、汗も冷えるし。肌着やTシャツを下に着るといいというものも、マネキンに着せてめくって見せる、といったこともやっています。

また、色がついてるカレンダーもお渡しします。黄色は給食のない日、緑色は親御さんが参加しなきゃいけない行事、あとは歌を歌う行事があるんだよとか、懇談会が年に何回かあるから、それに必ず参加しなければいけないとか。PTAの奉仕作業が夏休み中にあるから、これに必ず行くとか、そういったことを書いています。これは学校から1年分のスケジュールをもらってつくったものをもう一回学校の先生に戻して、そこで最終的にチェックをしてもらって保護者さんに渡します。

そして、コミュニティーセンターの近くにある学校に行って施設の見学をします。その時に資料を用意して配っています。そこには、就学説明会から入学までのスケジュール、何月にどういったお便りが来ます、何月にこういった体験会があり

ます、何月になるとこういった書類が届くので、それに書いて持って行ってください、ということが書いてあります。

それから、圧倒的に働いている親御さんが多いので、給食の無い黄色の時に子どもが家にいて、誰がご飯を食べさせるんだとか、誰が子どもの相手をするんだとなった時に、児童クラブ（学童保育）があるんだよということを、担当の方に来ていただいて、ここで案内も同日開催で行っています。

(6) プレスクールで大切にしていること

大切にしている視点は、図4の網掛けのところを私たちはすごく大切にしています。子どもさんたちの発達を促す経験が少なかったり、語彙が少なかったりすることによってイメージする力が育たなくて、発達や子どもさんが成長していく過程でいろいろと突きつけられる課題とか困難さがあります。社会全体の問題になる前に私たちは幼少期に力を入れていきたいという気持ちでやっています。幼少期は問題が表面化していないです。家庭の中にいる子どもさんたちで、なかなか外には見えにくいのですが、深刻化していないことが多い中で、人生の中での基礎を培うとても大事な時期なので、この時期に焦点化してプレスクールをしていこう、そういった視点を持っているということです。

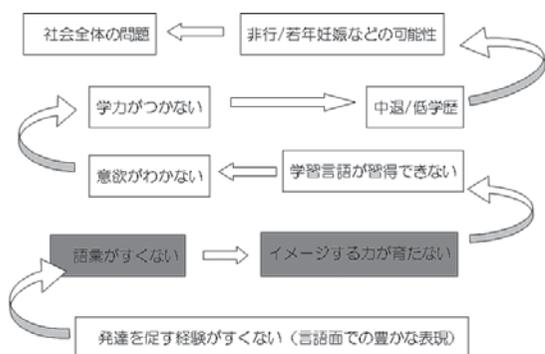


図4 プレスクールで大切にしている視点

私たちは全ての子どもにたくましく育ててほしいと思っています。生まれて、育て、学んで、働いて、幸せをつかむというのが私たちの願いであり、私も含めて人としての権利ですので、プレスクールを通じて就学前のサポートが効果的だということを伝えていきたいと考えています。

〈質疑応答〉

Q. 母国での子育て文化について

就園していない5歳の子どもは戸外遊びの経験が少ない、体力がない、偏食が多い、家庭で赤ちゃん扱いされていることが多いと仰っていましたが、母国での子育てがそうなのでしょうか。

川上：今、私たちの多文化ルーム KIBOU を利用しているご家庭は、フィリピンルーツの方やブラジル、ペルー、インドネシアなどですが、母国での子育てがどうかということではなく、今、身を置いている環境がなかなか母国で子育てするのと同じような環境にならないだとか、今働いているところもシフトで昼夜関係なく日勤、夜勤を繰り返す中で、子どもを暗い（夜勤があるため日中も部屋を暗くしている）狭いアパートの中で育てなければいけないような状況があったり、なかなか子どもが発達していく良い文化的体験をさせることができなったりします。そういったことに起因することが多いので、どこの国出身とか文化がどうかということは私たちの方では全く感じていません。

また、母国でも日本でも、就園経験があり戸外遊びの楽しさを知っていたり、他の子どもたちと関わって遊ぶ楽しさを知っている子どもで、一時的に不就園の状態にならざるを得なく、家でおとなしくすることを要求されたりしているような状況の子どもは、一旦外に出るとばーっと、家の中で長く過ごしていたストレスを発散して、プレススクールに落ちついて参加できないことがあります。

3. 多文化共生保育が一般化される未来に向けて

佐々木由美子

(1) 大泉町と外国人居住者

私は足利市にある足利短期大学で保育者養成の仕事をしていますが、実は群馬県の太田市に住んでおります。群馬県太田市は群馬の南東に位置し、外国人が非常に多く、隣の大泉町は以前から多文化のまちとして日本の中で取り上げられている所です。本日はそのこの保育について話をします。それからドイツの多文化についてもお話しします。

まず、多文化地域として早い段階から注目された群馬県大泉町は、1990年に入管法が改正され、日系の2世、3世とその配偶者にも在留資格が与えられ、日本で単純労働につけることになりました。その時に、大泉町にある中小企業の方たちが集まり、「ブラジルにぜひ働きに来てください」ということで誘致に伺ったことがあります。それを機に、どんどん外国人人口が増えていきました(図5)。2019年9月30日現在の外国人人口比率が18.7%、10月31日には18.8%になっています。まだどんどん増えていくことが予想されます。

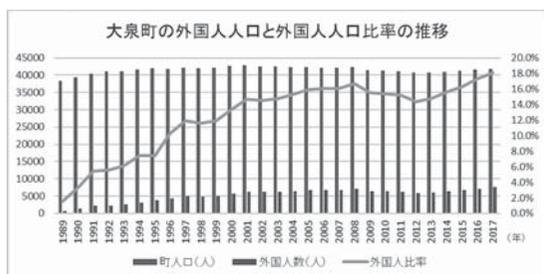


図5 大泉町の外国人人口とその比率の推移

ただ、全部の人口が非常に少なく4万余で、外国人の人数的にはそれほど多くないのですが、パーセンテージが高いということです。こちらは日本国籍を取った人が含まれてないので日本国籍を取った方も含めると、外国にルーツのある方が約30%はいるのではないかとされています。そして、現在では50カ国以上の方が大泉町に住

んでいます。一番多いのがブラジル国籍の方です。ブラジル、ペルーで、次がボリビアでしたが、今は、ネパールが3位になりました。ネパールの方が非常に多く来るようになっています。

大泉町は群馬県の南東にあります。認可保育所が全6園あり、3園が公立、そして3園が私立です。ここには公立保育園の分布を入れましたが、6園全部に外国人の子どもが在園しています。人数にはばらつきがありますが、全ての園で外国人を保育しています。多い所で17.6%。これも外国にルーツのある子を含めると、30%位は在籍していると先生が言っていました。

(2) 多文化共生を知るための講義

足利市は大泉町の隣で、群馬県と栃木県ではありますが、車を使えば30分で行くことができます。足利や太田市も外国人が増えてきてます。足利短期大学では、3年前の2017年から多文化保育という授業をカリキュラムに入れて、大泉の子どもたちの様子などを学ぶ授業をさせていただいています。その中で、公立の園に学生たちを連れて伺って、一緒に1日過ごすという授業をやっています。

また、大泉町は「活かな世界のグルメ横丁」というイベントを月に1回行っています。日曜日いろいろな国の屋台が出て、お料理を振る舞うというお祭りです。そこに学生たちと一緒にいきます。「活かな世界のグルメ横丁」では、いろいろな国のブースが出てきます。その中に私たちが「わくわくひろば」というボランティアのブースを作っています。入口にポルトガル語で、「ここはどなたでも来ていいですよ、ただですよ」というのが書いてあります。学生たちがボランティアいろいろな遊びをしています。

その中で大泉町を探検してもらったりします。このお祭りの中には外国人の親子連れがたくさんいらっしゃいます。そこで、その親子連れにインタビューをするのです。例えば「日本で子育てすることで困ったことがありますか」とかを聞くというようなことを授業の中でミッションとして

やってもらっています。それは、そういうことを聞くことが目的ではなくて、外国人の方とお話をするという関わりを持つことを大事に考えています。

それにより、参加した学生たちの外国人に対するイメージが変わったと言うのです。今まで関わったことがないと、何となく敬遠していたということなのですが、お話をしてみると、みんなフレンドリーで優しく、言葉があまり通じなくてもコミュニケーションがとれるなど、学生たちの考えがすごく変わっていくという経験をこの授業の中でしています。実際に関わることは非常に大事だと思ひまして、保育園に行く、イベントに行くというのを授業の中で行っています。

(3) 多文化共生保育の現状と課題

授業ではなく問題の保育の話をしてします。これが大泉町の多文化共生保育の様子であり、いろいろな課題等が見えます。まず、保育の中でも保護者に関する側面、それから保育ですから保育者に関する側面、そして子どもに関する側面という形で見ていきます。まず保護者の現状と課題では、非常に不安定な収入の保護者の方が多いこと、長時間労働が多かったり、教育に関する日本との温度差が非常にあったり、教育に無関心な方、貧困などがあります。これは日本人でも同じですが、外国人の方でもこういうことがあり、保護者支援はとても大事になっています。大泉町の外国人住民には、定住志向の場合と見通しなしで日本に来ている方がいて、定住志向だと、日本文化や日本語を獲得することを求めている場合もあります。しかし、見通しなしで来ると、「帰るからいいんです」ということで、就園も就学もしないという場合もあります。

保育者はどうかというと、非常に多忙であるということに加え、外国人が非常に多く、これがもう30年間も続いているので、当たり前になっていて、多文化や外国人ということをあまり意識していない状況が見られました。そんな中で、保育者の方々にも、私たちと一緒に考えていきましょ

うと、多文化保育研究会を立ち上げて、多文化保育について改めて考える場をつくり、協働・連携しています。保育者が感じていることは、一生懸命外国の子どもたちに対応しているけれども、ある日突然「国に帰ります」と言って帰ったりとか、「転居します」と言ってどこかに行ってしまったりということもあり、諦めや無力感を感じてしまうということなのです。

そんな中で育ってくる子どもの課題は、ダブルリミテッドといって、日本語と母語と両方が年齢相応に話せないという状況になってしまうことです。保育の現場では、子ども同士は同じ言葉で遊べてしまいますし、あまり言葉を必要としないので、いろいろなことが顕在化しにくいのです。ブラジル人だと、ポルトガル語が不十分。長いことお母さん、お父さんがお仕事している、家であまり会話する機会がない。保育園にずっといると、日本語は習うけれども、系統立って家では習っていない。家では日本語の絵本もなく、日本語に触れる機会がない家庭が多いのです。すると、やはり日本人のように日本語も身につかない。かといって、ポルトガル語が身につくかということも身につかず、ダブルリミテッドの状態になってしまい、そして、言葉が通じず情緒不安定になることもあります。また、転居が多いと継続した学びができないというのが就学前の課題なのです。

そこから就学後になると、どういうことが起こるかということ、学習言語が身につけていないので、授業についていけない子どもが多く出てきます。それから、保護者との疎通ができなくなるのです。母語が話せないということで、保護者と会話ができない子どもたちがかなり問題になっています。その結果、精神的な不安定がずっと続きつつ、将来どうなるかということ、不就学や低い進学率、そして安定した職を得ることができないということになります。そうなる、最終的には貧困が再生産される可能性も出てきますし、治安への不安もあります。

そんな中で、やはり人の土台をつくるのが幼少期であり、言葉を覚えるのも幼少期なのです。で

すから、保育の現場は非常に大事なわけです。

(4) 多文化共生保育を支える保育士

そこで子どもを支える保育士を導入していく必要性があります。ポルトガル語やスペイン語を話せる通訳さんがいるところもありますが、子どもとずっと一緒にいるということが大事です。子どもと一緒に過ごすことで全ての子どもが安心して自己肯定感を育みます。子どもに自己肯定感を与えるというのはその後の子どもの人生に大きな影響を及ぼすので、子どもが自分に自信を持てるような保育をしていくことが大事だと思います。

実は大泉町で働く外国人の保育士もいます。彼女はペルーから来日していて、ご主人がブラジル人なので、日本語とスペイン語、ポルトガル語が堪能です。彼女は日本の保育士資格を取り、大泉町の公立保育園で働いていますが、大泉町にはまだ国籍条項という壁があります。群馬県はまだ保守的で、外国人が公務員になれません。ですから、非常勤という形で働いています。ただ、すごく活躍していて、周りの保育士さんたちからも信頼されていますが、常勤では働けないのです。

彼女が行っているのは、母語を介した保育支援であり、媒介者としての役割を果たしています。子ども同士の間に入る、それから保護者と保育者、保育者と子どもの間に入って繋ぐ。一番大事なことは、外国籍児、保護者に安心感を与えているということです。これがすごく大きい。例えば、欠席する時にお電話をしてくるのですが、その時に彼女を必ず電話に出す。そうすると、自分の思いが必ず伝わるということで、保護者が安心します。そういうことが、外国籍児の保育園適応を非常に促進している。先ほども岩倉さんからお話がありました。思いを受けとめることが非常に大事で、それが日本語だけだと思いを伝えられないし、受けとめることもできないことがあるので、母語を介した支援は非常に大事なのです。

大泉町多文化保育研究会を、2014年から実施しているのですが、これは、保育の場と保育者養成校、研究者が連携する組織づくりを目指して始

めたものですが、今では行政の方も入ってきて下さって、行政と保育の場、そして養成校という形で三者が連携して大泉の保育を考えていくという場になり、年に1回シンポジウムを行っております。6回目のシンポジウムを今年12月に予定しています。

6回目の時にゲストで招いた3人はみんな外国にルーツがあり、保育士の資格を持って保育の現場で働いている人たちです。彼女たちは母語を介した支援を行っています。3人が揃っていろいろな事をシンポジウムの中でお話しして下さいました。聞いているのはほとんどが保育者ですが、保育者及び研究者、それから行政の方もいます。この日は外国人の保育者が話題提供するという事で、部屋に入りきれないほどの方々が来て、詰め詰めで行いました。

(5) 日本各地での多文化共生保育の取り組み

他の多文化地域ではというと、先進的だと言われている福井県越前市のことをお話しします。現在の越前市の外国人人口比率は5%ですが、この市は、2000年という早い段階で公務員の国籍条項を撤廃し、2017年にブラジル国籍の外国人を正採用しています。子ども福祉課には3名の外国人臨時保育者が働いています。この人たちは日本の保育士資格はないですが、保育助手として保育園に常時勤務しています。また、3名の通訳の方も巡回するという形で、保育園を回っています。

さらに、保育者のためのポルトガル語講座というのを仁愛大学で行っていたり、それから、保育士採用試験でポルトガル語ができると加点されたりします。「ポルトガル語がどんなふうにとれぐらいできると加点するのですか」と聞いたら、ほんのちょっとでもいいのだそうです。ポルトガル語を覚えようとする意思や、ポルトガル語を話そうとする意思があれば加点するという事でした。

次に横浜市の例です。外国人人口比率は3%位ですが、「外国に繋がる学生の為の奨学金制度」ということで、外国人の保育者を増やすというこ

とを目的に YMCA と協働しています。

それから、川崎市です。川崎市は在日韓国人が非常に多かった所で、現在はニューカマーと呼ばれる南米系の方達も増えてきていますが、外国人保育者を採用している園があります。日本の保育士資格はないですが、たしかアルゼンチンの保育の資格を持った方を正式に採用して働いてもらっているとのこと。以前は韓国人が多かったのが民族保育といって、韓国の文化を伝えたりしていましたが、いろいろな国の人たちが来るようになったので多文化共生保育として、さまざまな取り組みをしています。例えば、保護者の方が園に来て、その国のお食事を作ってお昼に振る舞ったり、文化交流の取り組みをしています。

(6) ドイツでの多文化共生保育

多文化先進地域と言われているドイツは 2001 年の PISA (学習到達度調査) で最下位の方でした。これは PISA ショックと呼ばれ、就学前の言語の問題が大きいと考えられました。移民や難民がたくさん来てドイツ語がわからない子どもたちが増えたことに起因していると考えられたため、就学前教育改革を行い、ドイツ語を母語としない子どもだけではなく、全ての子どもへのドイツ語教育を保育の場で行うということが始まりました。今、すごく成果が出ていると言われてます。小学校入学までに美しいドイツ語を話そうということですが、保育の場では座らせてドイツ語を勉強しますというのではないのです。そうではなく、保育の中で保育者が豊かなドイツ語を話し、絵本を使ったり、具体物を使ったりして言葉を教育しています。

ここで徹底しているのが、園ではドイツ語で、家庭では母語で話してくださいということです(図6)。そうしないと母語が維持できなくなってしまいます。これは日本でも非常に大きな問題で、「これからもあなたは日本で暮らしていくんだから、家でも日本語で話して下さい」と言う保育士さんがたまにいます。しかし、家で保護者がたどたどしい日本語で子どもに話しかけたら、子

どもが正しい日本語を覚えなくなってしまう。また、日本語だけになると保護者の言葉が分からなくなり、保護者と疎通ができなくなる問題点があるので、「園ではドイツ語で家では母語で」はすごく良い方法だと思います。ですから、大泉の先生たちに、園では日本語、家庭では母語でということを推奨しています。



図6 ドイツにおける多文化共生保育の方針

ドイツ語教育は以前、言語テストをやっていたのです。それが観察によるものになりました(図7)。言語テストは、Delfin4と呼ばれているものですが、外部の評価者が園に来て、4歳児を取り出してテストをします。4歳児だと、やはり知らない人が来て色々聞かれたら実力が出せない、ふざけてしまう場合もあるので、これだと正しい評価ができないということで変わってきています。写真はBaSiKと呼ばれるものです。1人に1冊これがあって、保育者が子どもの様子を観察しながら、「今こういうことができるようになった」とか、「今こういう支援が必要だ」というのを記録しな

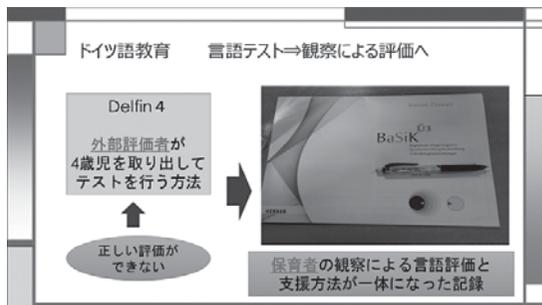


図7 ドイツ多文化共生保育での言語評価

がら評価するものが出てきました。これを使っている所は、かなり言語の発達に効果が出ていると言われています。ですから、言語をテストするより観察で評価する方法の方が有効だとドイツでは言われています。

私はドイツの2つの地域、NRW州、ノルトライン・ヴェストファーレンと、あとザクセン州の幼児教育施設（KITA）を訪問しました。NRW州で視察したKITAはアパートみたいな所の下で1階が園です。上は普通の人々が住んでいます。そこで子どもたちが大声で遊んでいる様子を見て、「うるさいという苦情が出ませんか」と聞いたら、ここでは、子どもの声は騒音ではないと条例で規定されているとのこと。これはすごいことですね。日本だと、うるさいからここに園を建てては嫌だ、ということが結構ありますが、この条例はすごいと思います。

ザクセン州で視察したKITAはすごく貧しい地域にあり、園児数184人のうち120名が何らかの理由で個別対応が必要だというKITAでした。約半数が移民や難民なので、ドイツ人ではない、ドイツ語を母語としない子どもとか、ドイツ系の家庭もその多くが貧困の要因を抱えています。車椅子の子どももいるし、障害のある子どもも多数通っています。

保育者は30名で、全員が幼児教育の資格を持っていますが、特別支援対応はソーシャルワーカーの資格を持っています。3歳児以上はクラスに必ずソーシャルワーカーの資格を持った人がいます。ドイツ以外の国にルーツを持つ保育者が6名で、補助の人を入れると8名がいろいろな国の人達です。中にはムスリムの先生もいて、ヒジャブをかぶって保育している先生もいました。

図8にある写真はポートフォリオで、誰にでも見える所に置いてありました。誰でも見られるようになっていて、保護者も見たり、行政の人も見たり、子どもも自分で見ていたりします。この中には子どもの発達の様子が全部書かれています。これを日本の保育者さんに話すと、「発達に遅れがある子とかはどうするのですか」などという言

葉が返ってくるのですが、ドイツは障害があるとか、そういうことを隠すことではなくて、本当に多文化なのです。文化を尊重するというか、いろいろな人がいていいという感じなので、ポートフォリオで子どもの育ちが見えるようになっていたのだと思います。



図8 KITAで掲示されていたポートフォリオ

それから、この園にはスヌーズレン室がありました（図9）。これは一般的に、障害児や障害者の施設で重度の知的障害のために設置され、ここに入ってリラックスするお部屋になります。保育園にこれがあって、子どもがパニックを起こしたりした時に有効だということです。これは保育園にも有効ですが、実は先生方が使っている。先生たちは、結構ストレスがあるので、ここでリラックスすることがあると仰っていました。



図9 KITAのスヌーズレン室

(7) 多文化共生保育の一般化を目指して

では、多文化共生保育が一般化されるにはどう

したらいのでしょうか（図 10）。まず、幼児期の言語発達やバイリンガル教育を意識した保育は絶対必要だと思います。母語を失ってしまうことは非常に子どもにとって良くないことであり、子どもが母国や母語に自信を持って生きていけることは子どもにとって非常に大事なことで、母国の文化や母語を大切にす保育をしていかなければいけないだろうと思います。

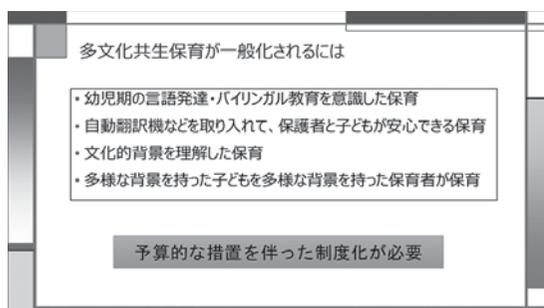


図 10 多文化共生保育に求められる保育

でも、ポルトガル語やスペイン語、英語に関しては通訳の人がたくさんいると思うんですが、大泉だと約 50 カ国、これに全部通訳さんを入れるというのは不可能です。ですから、自動翻訳機も使っていくということがこれからは必要になってくると思います。翻訳機は変に訳してしまうこともあります、無いよりは全然ましだと思います。そこで保護者と子どもが安心できる保育をしていく必要があると思います。

それから、文化的背景を理解していく必要があります。日本にいるから日本人の様に同化していくことが良いではなくて、いろいろな背景を理解していく。宗教に対してもそうですし、いろいろな事を理解していくのは大事なことだと思います。そして、多様な背景を持った子どもを多様な背景を持った保育者が保育していくことが一番良いことであり、外国人や LGBT などいろいろな人がいますが、そういう人たちが保育の現場で活躍できるようにならないといけないと思っています。

多文化保育が一般化されるためには、予算的な

措置を伴った制度が必要だと思います。それが一番大事で、これを訴えていかなくてはいけないと思いますし、本当に一番やって欲しいと思うのは、就学義務化です。外国人には就学義務がないので不就学が起こる。就学義務があれば、保育の場でも外国人に対しての教育的意識が変わってきます。そういう制度化は絶対に必要なもので、多文化が一般化されるには、やはり制度から構築し、私たちの意識も変えていくことが大事だと思います。

セミナー全体を通してのまとめ

佐々木：実は私、今日、朝 6 時半に家を出てきましたが、ここに来て本当によかったと思っております。というのは、長浜市とか西尾市がすごく先進的な取り組みを実施しているということを目撃で知ることができて、今後ぜひお邪魔していろいろなことを見せていただいたり、勉強させていただいたりしたいと思ったからです。

実は、私の教え子の卒業生が今年の春、就職先として大泉町の公立保育園を受けたのです。彼は、ブラジル国籍です。応募したら役場から電話がかかってきて、「日本国籍が無いので受けられません」と告げられました。本人は、国籍条項のことを知らなかったのです。日本で生まれていて、日本語もできるし、日本の教育をきちんと受けて、保育士と幼稚園教諭の資格を取ったのです。それなのに、受験さえできないという状況を見てきました。そんな中で、お二人の話、すごいと思いました。本当にこれは持ち帰って大泉町にも問題提起していきたいことです。

それから、大泉町にはプレスクールが 1 つもありません。外国人の子どもが多いのにプレスクールが無いのは、本当に問題だということを感じています。今、幼小連携や、スタートカリキュラムなどに取り組んでいるのですから、外国籍児にとって、やはりプレスクールは重要だと思います。そのことに関しては多文化保育研究会の中でも取り上げてはいるのですが、今後の課題ということになりますので、西尾市の取り組みを持

ち帰って町と話をしていけたらと思います。

最後に、多文化共生が一般化されると言っていますが、ヨーロッパに行くと、多文化共生という言葉自体を「何それ？」というふうに言われます。

それは当たり前だからなのです。ですので、多文化共生という言葉が日本でもなくなって、それが当たり前になるのが本当の多文化共生だと思っています。